

ブドウ球菌や連鎖球菌外毒素(SEs, TSST-1, SPE-A)はヒトやマウスのMHCクラスII分子に直接結合し、この複合体を特定のV $\beta$ をもつT細胞が認識して活性化される。さらに、これらの抗原の種類によりV $\beta$ が特定されることも判明した。これらの抗原とT細胞間の認識機構を究明する目的で我々は、22種類のヒトV $\beta$ 特異的プライマーを用いたPCR法によりこれを定量した。その結果、Kappler等の同様な実験結果(Proc Natl Acad Sci USA 86: 8941-8945, 1989)とほぼ同じであった。若干の違いは、SEBで刺激したときV $\beta$ 13.2陽性細胞が、SEEで刺激したときV $\beta$ 16陽性細胞がそれぞれ増加していた点である。これらの違いは日本人特有のものであるかもしれない。

## 12. EBウイルスのウサギ眼感染実験における抗体の推移

(第二病院眼科)

亀井 裕子・宮永 嘉隆

(日本医大微生物免疫)

渡理 英二・高橋めぐみ

我々はEpstein-Barrウイルス(EBV)をウサギ眼硝子体中に注入することにより、EBV特異抗原に対する抗体が上昇することをすでに報告している。今回は、ウサギに対するEBV感染についてさらに検討する目的で、初期抗体の推移、抗体価の長期的推移、PCR法を用いた眼局所におけるEBVの消長の検討を行った。実験には白色ウサギ、EBV感染B95-8細胞(予研分与株)を用い、抗体価の測定は蛍光抗体法にてVCA, EAに対する抗体について検討した。その結果、

EBVを硝子体に注入することにより、免疫学的一時応答、ならびに二次応答が惹起されることが確認された。また、注入されたEBVは少なくとも3日は眼局所にとどまっており、EBV注入眼を注入後24時間目に摘出して抗体が上昇することが確認された。EBVがいかなるメカニズムで抗体産生系に取り込まれるかについては、今後さらに検討を重ねる必要がある。

## 13. ミエリン塩基性タンパクの免疫特異部位について

(脳神経センター神経内科)

太田 宏平・清水 優子・江島 光彦・

田中 久恵・植田 美加・大橋 高志・

丸山 勝一

ミエリン塩基性タンパク(MBP)は強い脳炎惹起性を有するが、その抗原特異部位は、例えば、アレルギー性実験性脳脊髄炎では動物の種、系統で異なっている。一方、ヒトの場合はこの検討はまだ不十分であるが、本研究では日本人のMBPの免疫特異部位について探索し、これまで主に欧米人で報告されたMBPの免疫特異部位と比較検討した。その結果、日本人健康成人のMBPに対するT cellの出現頻度は短期T cellクローニング法では約4%と欧米人のそれと変わりがなかった。また、MBP反応性T cell lineの抗原特異部位の検討では欧米人で報告されたMBPアミノ酸配列の84~102, 143~168に対し多数のT cell lineが特異的反応を示した。このことより、ヒトMBPの抗原特異部位は、人種を越えて共通である可能性があると考えられた。